宇宙人ジョーンズ：ミッドチルダ調査報告

ロベル・アクベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙人ジョーンズ：ミッドチルダ調査報告

【Ｎコード】
Ｎ７３３０Ｐ

【作者名】
ロベル・アクベル

【あらすじ】
ろくでもない、この世界……。

そんな地球から離れ、あの男がミッドチルダにやってきた。

これは、ミッドチルダ調査員となったジョーンズの日々の調査の物語である。

第一報告書～出現～（前書き）

やっちゃった、ついつい面白いかなと思ったのですが……。

そんなに長い話は書きませんが、感想お待ちします。

第一報告書～出現～

数ある次元世界の中心、ミッドチルダ。

その首都部であるクラナガンの繁華街にある喫茶店にて、とある女性が珈琲を飲みつつ、その向かい側の席に座る女性に話し掛けた。

ショートカットの茶髪、顔立ちは若干幼さが残るものの、美少女と言っても過言ではないだろう。

「なぁ、フェイトちゃん？
こんな噂知っとるか？」

向かい側の席、フェイトと呼ばれた金髪美少女は手にしたカップを置き、独特のニュアンスで話す少女を見た。

「噂って……また変なのじゃないよね？はやて」

フェイトは苦笑しつつ、目の前に座る少女……はやてに尋ねる。

彼女は毎回、噂や噂やと騒ぎ立てるのだが、その大抵は下らない与太話や局員の恋愛等に関する事であり、外見通りに優しいフェイトは、毎回それの聞き手になるのだった。

「変なのって、酷いな～フェイトちゃんは～」

はやてはわざとらしく言うと、フェイトの鼻先まで顔を寄せる。

「……何、はやて？」

若干引いてしまうフェイトだが、はやては小声で言った。

「……今回はな、宇宙人や宇宙人！」

「……」

フェイトは黙ってしまう。

宇宙人、いかにもはやてが食いつきそうな話だが、異世界を管理する管理局に籍を置くフェイトにとっては異文化や異民族と出会う事は多々あるので、例え宇宙人と会っても大して驚かない気がする。ちなみに、はやてもそこに籍を置いているのだが、如何せんゴシップ好きの彼女はこういった話題には敏感らしい。

「それがただの宇宙人やなくて、私らの世界……つまりは地球から来たらしいんや」

「えッ？それって、違法転移なんじゃないの？」

管理局は次元世界を無断で渡航する事を許可しておらず、つまりは違法行為なのだ。

「まぁ、単なる噂やけどな。
だけど地球のトミー・リー・ジョーンズっていう俳優に、そっくりな宇宙人が来とるらしいんや」

もう……また、はやてはそんな噂を。

そんなって、冷たい事言わんでぇなぁ〜。

そんな黄色い声を聞き流しつつ、彼女らの席の隣に座っていた男性が立ち上がり、伝票を取った。

厳しめな顔をした白人の中年男性、彼は珈琲と軽食の代金を支払い、その喫茶店を後にする。

そう、彼こそが地球調査員として派遣された宇宙人。

その名もジョーンズ。

彼は一旦地球調査員の任を解かれ、宇宙の技術で異世界ミッドチルダへとやってきたのだ。

ろくでもない、異世界を調査しに……。

これは、そんな異世界調査員の活動報告書である。

第一報告書～出現～（後書き）

・本日の調査報告

「この異世界の人間も、どこか抜けている」

第二報告書～アイスクリーム屋編～

この世界のアイスクリームという食物は、どうしてこうも人気があるのだろうか。

大した栄養価も無いし、殆どのアイスクリームは香料などを使っており、それほど美味いとは思えない。

ジョーンズはアイスクリーム屋の車で接客しつつ、そう思っていた。

時刻は朝の十時、小腹の空く時間帯だ。

忙しく働く女性が買っていったり、時々男性も買っていく。

そんなに良い食物なのだろうか？

すると、次の注文が入った。

「あ、おじさ～ん。
いつもの十五段重ねね～」

青く短い髪の少女、この店の常連だ。

隣にはオレンジ髪を二つに結った少女が、驚いたように青髪の少女を見ている。

「ちょっと、十五段なんて無理に決まってるでしょ！？」

青髪の少女は笑って答えた。

「にひひ～。
それが、このおじさんは出来るんだな～」

ジョーンズは彼女の注文に応えるため、一旦店から出る。

「ソイヤァァ――！！」

そして、ワッフルコーンに大量のアイスクリームを乗せていった。
凄まじい速度で全くブレも無く、垂直にそびえ立つアイスクリームのタワーが出来る。

オレンジ髪の少女は口をあんぐりと開け、アイスクリーム屋のオッサンがアイスクリームの塔を作り上げるのを見上げていた。

「オマタセシマシタ―！」

ジョーンズにとって、この食物を積み上げる事など、造作も無い。

だが、それを受け取った青髪の少女は言った。

「いつもありがとう、おじさん！」

眩しい笑顔で礼を述べる。

お礼、この世界でもあるのか……。

ジョーンズは少女の笑顔に癒やされつつ、再び店へと戻った。

無邪気な少女のお礼、これに勝る物は無い。

第二報告書～アイスクリーム屋編～（後書き）

・本日の報告書

「お礼、笑顔はどの世界でも尊い物らしい」

第三報告書～特別救助隊編～

この世界の人間も技術を持った為に、様々な危険と隣り合わせになって生きているようだ。

救助隊、他人の命を救うために命を懸け、わざわざ危険に立ち向かう仕事らしい。

「え～、今日から新しく入った新人のジョーンズ二等陸士だ。よろしく頼むぞ」

そんな上官の言葉にジョーンズは敬礼し、しばらくの間は同僚となる救助隊隊員の顔ぶれを眺めた。

「ジョーンズ、早速の初仕事だが……安心しろ、お前ならやれるさ！」

配属されて間もなく、とある空港で爆発炎上の事故があり、要救助者が多数いるとの事で、新入りのジョーンズも現場に駆り出される。先輩隊員の言葉を聞きつつ、ジョーンズは背中に背負った酸素ボンベと耐火装備を確認しつつ、火の中へと突き進んだ。

「誰か！助けて！」

「モウ、ダイジョブデス」

ジョーンズは結界に保護された女性数人を見つける。

確か、この世界にいる魔導師という輩が使う魔法だ。

「このバリアを張ってくれた子供が、妹を探すと言って奥に……」

ジョーンズはそれを聞き、女性達を先輩方に任せて走る。

魔力で強化した脚力よりも強いジョーンズの身体能力は、すぐさまその子供の所まで彼を連れて行く事が出来た。

……見えた、円柱状の空間にある螺旋階段を上っている。

すると、彼女の真横にある壁が爆発し、その少女を階段から吹き飛ばした。

「きゃあぁぁあ――！！！」

叫び声を上げ、落下する少女をジョーンズは瞬間移動をし、落ちる彼女の真下に現れ、抱きかかえる。

「モウ、ダイジョブデス」

いきなり現れた男にびっくりした少女だが、すぐに救助隊であるジョーンズにしがみついた。

「妹が……まだ、スバルがいるかもしれないんです！！」

その時、仲間から通信が入る。

『高町空尉が救助者を保護、名前はスバル・ナカジマ。

まだ、中に姉がいるらしい。
誰か、保護した奴いるか！？』

「コチラ、ジョーンズ。
キュウジョシャ、ホゴ！」

ジョーンズがそう返答すると、通信の向こうでは歓声が湧いた。

「良かった……スバルは見つかったんですね！」

少女はそう言うと、ぐったりと気絶する。

助けねば。

ふと、ジョーンズの中にそんな声が響いた気がした。

そしてジョーンズは酸素マスクを少女に着け、後ろを振り返る。

火の海だ。

だが、それがどうしたのだ？

ジョーンズはそう思い、少女に火が当たらないように駆け出した。

その頃、外では。

「隊長！ジョーンズを見殺しにするんですか！？」

「アイツは何考えてるのか分かんない奴ですけど、でも、いい奴なんすよ！？」

救助隊隊長に、ジョーンズの先輩や同僚が詰め寄っている。

「……仕方ないだろう、火の手が思ったより回っている。ジョーンズのいる所は火の海だし、空の魔導師達も手が足りないんだ！」

隊長はまどろっこしい気持ちを表すかの如く、怒鳴った。

救助隊の全員が俯いた次の瞬間、目の前の大火の中から人影が現れる。

それを見た救助隊の面々は、顔に歓喜の表情を表す。

「ジョーンズ……ジョーンズだ！
救助者を連れ、帰ってきたぞ！！」

隊長を含めた隊員は走り、ジョーンズの救助した少女を受け取り、救急車へと移した。

すると、隊員の一人がジョーンズの耐火服がやられ、怪我をしているのに気付く。

「！！ジョーンズ、お前も怪我を……！？」

その患部を見た隊員達は、絶句した。
そこから溢れる血液は、緑色。
人間のように真っ赤ではない、深緑の血液。
しばらく隊員達は無言だったが、隊長がジョーンズの肩を叩き、言った。
「お前は俺達の仲間だ！
それ以上でも、それ以外でもねェ！！」
そうだ、ジョーンズは仲間だ。
少女を救った、俺らの仲間だ！！
隊員達はそう言い合い、ジョーンズに振り返った。
……だが、そこにはもうジョーンズの姿形も無く、ただ主を無くした耐火服だけが置いてある。
“アリガトゴザマシタ”
グチャグチャな字でそう書いてある置き手紙を見た隊長は、誰かを助けたいと思う気持ちは、どんな奴でも変わらないという事を、改めて知った。

ジョーンズは鎮火された空港を眺め、傷の手当てをする。

彼の頭の中では、ある言葉が反芻されていた。

【助けてくれて、ありがとう】

少女が救急車に乗る前、ジョーンズに言った言葉だ。

……悪くない。

ジョーンズはそう思い、煙の止んだ空港を立ち去る。

第三報告書～特別救助隊編～（後書き）

・本日の報告書

「人の命は尊く、仲間は愛しいものだ」

第四報告書～学芸員編～

どこの世界でも、人間は古代の浪漫を求め続けるらしい。

第１６２観測指定世界。

ジョーンズはこの荒れた大地を眺め、砂の付いた髪を払った。

今回は学芸員として、遺跡探索に参加した彼であるが、ジョーンズにはイマイチ他の学生や学芸員が発掘する遺物の価値が分からない。

凄いツボだ！

……ただの欠けたボロいツボだ。

これは、昔の人々の絵画だ！

……ただ、薄汚れた紙切れだ。

ジョーンズは遺物として発掘された品物を、ただただ輸送用の箱に詰めるだけである。

片手で軽々と箱を持ち上げ、丁寧にトラックに積んだ。

すると、近くにある管理局の観測基地から連絡が入る。

『危険物指定のロストロギアが発見されたので、発掘員は直ちに避

難して下さい』

その指示に従い、ワラワラと管理局の用意したトラックに乗り込む学生達。

それに外れ、倉庫に戻ろうとする学生男女二人組がいたので、ちゃんと指示に従うように彼らの目の前に立ちふさがったジョーンズ。

「あっ、ジョーンズさん。
僕達、管理局に引き渡すロストロギアを取りに行くんですが」

男性の方の学生がそう言ったので、ジョーンズは現場監督の教授の言葉を思い出した。

……うむ、確かにそう言っていたと思い出す。

二人では大変だと思い、ジョーンズも手伝う事にした。

今まで運んだ箱の中では一番小さく、女性でも持てる位に軽い。

「管理局も大変ですよね、わざわざこんな辺境の世界に任務なんて」

箱を持った女子学生が言ったが、ジョーンズにして見れば、この学生達も辺境で穴掘りをする変人にしか見えなかった。

「……ん？
なんだ、あの土煙？
もしかして、局員か？」

そう言う男子学生の指の先には、地平線から迫り来る土煙が立ち上

がっている。

しかし、ジョーンズの宇宙人の視力は人間のそれを遥かに越えており、彼は迫り来る物体の正体を見る事が出来た。

楕円形の青いボディ、その中心にはモノアイのあるロボット。

それが二十程、こちらに移動している。

管理局があんなロボットを使っているなど、聞いた事が無かった。

「ニゲロ！ニゲロ！」

二人の学生はジョーンズの言った事の意味が分からない様子だったが、ようやくロボットの姿が見えた事により、急いで駆け出すジョーンズ達。

だが、どうやらロボットは女子学生……いや、その手荷物のロストロギアを狙っているらしい。

「パス！パス！」

ジョーンズは追い詰められかけた女子学生にそう言うと、彼女は急いで手に持った箱をジョーンズに放り投げた。

それを受け取ったジョーンズは、アメフト選手並みのスピードとパワーで走り、発掘現場ならではの岩の塊などを突き破り、ロボット達から逃げ回る。

どうやら本当にロストロギアを狙っているようで、学生達からロボ

ットを引き離す事に成功した。
もの凄い速度で走り、跳躍をして、地面を掘ってある現場から抜け出す。
ロボットもそれに追従した。
全く、何故遺跡のガラクタがこうまでして欲しいのだろうか。
ジョーンズはそう思いつつ空を見上げると、ピンク色の閃光が見えた。
次の瞬間、追ってきていたロボットに桃色の光の柱が降り、そのボディを徹底的に破壊する。
「ジョーンズ学芸員ですね？
時空管理局です。
あなたを助けに来ました！！」
そう言って現れたのは、白いコスチュームを着た十代半ばの美少女だった。
栗毛の髪をサイドに二つで結い、白いリボンで結んでいる。
赤い宝玉が先端に付いた杖を持っており、ゆっくりと降下してきた。
ジョーンズは黙ったまま、ロストロギアの入った箱を彼女に渡す。
「あっ、ロストロギアですね。
確かに受け取りました」

と、あの男女の学生達が二名の女性局員に連れられて現れた。

「ジョーンズさん、良かった。無事だったんですね」

女子学生が安堵し、へたり込む。

だが、その二名の局員は白いコスチュームを着た局員に念話と呼ばれる遠距離通信魔法を使い、話し掛けた。

無論、宇宙人のジョーンズには筒抜けだが。

『なのはちゃん、さっき広域スキャンしたんやけど、そのジョーンズっつう学芸員さん……人間やないみたいなんや』

『ええっ、本当なの？
見かけはちょっと怖いけど、優しい人だと思うけど？』

『……でも、リインとはやてのスキャンにそうそう間違いは無いよ？
それに、この人の走るスピード……時速八十キロだって』

『です……ちょっとお話を聞いた方がいいんじゃないんですか？』

マズいな。

ジョーンズは久々に焦った。

外見は地球人というか、彼らとほぼ同じ構造をしているミッドチルダの人々にそっくりにしているが、流石に精密検査をされたらバレる。

仕方無い、好きではないが奥の手を使おう。

ジョーンズは胸のポケットからサングラスを取り出し、かけた。

「あの……ジョーンズさん、ちょっとお話が……」

そう白いコスチュームを着た少女が口を開いた瞬間、ジョーンズは手に持った小さな棒の先端を発光させる。

すると、学生を含めて局員達も石化したように動かなくなった。

これは記憶を消す機械だが、異世界用にデバイスと呼ばれる情報端末のデータも消すように設定されている。

彼女らが意識朦朧としている間に、ジョーンズは姿を消した。

その数秒後、全員の意識がはっきりとし、辺りを見回す。

疲れているのだろうか？

そう思いつつ、局員は軽い事情聴取を始め、学生達は素直に答えた。

誰も、ジョーンズという学芸員の存在すら忘れているようだ。

その後、大学の関係者の記憶や局員の記憶を消去したジョーンズは、最後に大学の博物館を見て回った。

結局、古代の遺物とやらの魅力は分からなかったが……。

ジョーンズは足をあるガラスケースの前で止め、展示物を見る。

……土偶はキュートだ。

そう思い、博物館を出た。

途中、あの男女の学生達とすれ違ったのだが、互いに何の挨拶も無しに終わり、外に出たジョーンズは空を見上げる。

現在があれば良いと思うかもしれないが、それは過去という柱によって支えられ、現在は自分達の行いで未来を支える柱となるのだ。

今回の調査で、何となく感じた事だった。

第四報告書～学芸員編～（後書き）

・今回の調査報告

「土偶と呼ばれる発掘品は可愛い」

第五報告書～地球へ一時帰還、銭湯従業員編～

地球、久々に帰ってきた惑星だ。

ジョーンズは、神奈川県の海鳴市という場所に来ていた。

辞令で一旦地球の調査に戻るのだが、まあすぐにミッドチルダに戻る事になろう。

ジョーンズは半纏を着て、銭湯の遊技場の掃除をしながら、そう思っていた。

それにしても、地球人は相変わらず温泉が好きらしい。

今日は先程、十何人ものお客様が一度に来ていたと同僚から聞いていた。

そのお客様は美少女美女軍団らしく、男性の同僚はかなり興奮している。

やれやれ、全くもって地球人は簡単な生物だ。

……と、ゴミ箱の中身がたまってきたので、ジョーンズはそれを捨てる為に一度遊技場を出た。

そして戻ってくると、お客様が遊んでるらしい、女性の声が響く。

「あ～、また負けた～」

「ふっ、シャマル。
お前もまだまだだという事だな」

卓球台にて、短い金髪の女性が床に突っ伏しており、ラケットを片手で弄びながら、ピンク髪の女性がそれを見下していた。

「くそッ！またシグナムの勝ちかよ」

赤髪の少女が、悔しそうに地団駄を踏んだ。

どうやら、勝者がシグナムで敗者がシャマルという女性らしい。

どちらもかなりの美貌を持っているのを見ると、彼女らが噂の美少女美女軍団のようだった。

ジョーンズは彼女らを一瞥すると、また掃除を始めようとしたが、そのシグナムという女性に呼び止められる。

「あぁ、従業員の方。
いかがです？やりませんかな？」

と、ジョーンズにラケットを投げた。

ジョーンズはそれをキャッチし、軽く手首を回した。

……面白い。

少し対抗意識を持ったジョーンズは、スタスタと卓球台へと向かう。

パコン！パコン！パコン！

シャマルと赤髪の少女は、そんな音と共に首を左右に振る。

ピンポン玉の打ち合いが、かれこれ百回近く繰り返されていた。

「はぁ、はぁ……くっ、何という強さだ！」

シグナムはラケットを振り、玉を返すが、対するジョーンズは一寸もラケットを動かさずに、ただ手に持った状態で返してくる。

……というか、自分の打つ玉打つ玉が全て彼のラケットに当たるのは何故だろうか。

「だが……このシグナム！
ここで負けるわけには、いかない！！」

シグナムはラケットを振りかぶり、思いっきり打ち出した。

「紫電一閃！！」

もの凄い速度のスマッシュ、プロ顔負けのパワーだが。

コンッ、とジョーンズは相変わらず持ったままのラケットで打ち返した。

しかも、台の左端にいたシグナムとは逆の、右端のコーナーへと返す。

「何ィッ！」

シグナムは飛び出し、何とか玉を返そうとするが、奮闘虚しく玉はラケットの先端を掠り、そのまま遊技場の床へと落ちた。

シグナムも勢い余り、ドサッと床に倒れる。

カンッ、コロコロと玉が転がる音が響く。

ジョーンズは床に倒れ伏せたシグナムに、手をさしのべた。

シグナムは不敵な笑みを浮かべ、その手を取る。

「私はシグナムだ。
負けましたよ、ご老人」

「ジョーンズ、デス」

二人は互いの健闘を称え、そのまま握手をした。

彼女とはまだまだ試合をしたかったのだが、どうやら仕事が入ってしまったらしく、非常に残念そうに帰って行く。

ジョーンズは彼女らが帰った後、額に滲む汗を軽く拭った。

そこで、ハッと気付く。

……そうだ、地球人はこういう時に温泉に入るのだ。

ジョーンズはそう思い、休憩時間に温泉に入った。

暖かい……彼女との戦いが、この暖かみと共に脳髄に染み渡る。

温泉の楽しさ、ようやく分かった気がした。

第五報告書～地球へ一時帰還、銭湯従業員編～（後書き）

・本日の調査報告

「温泉は疲れた時に入ると最高だ」

「温泉でやる卓球、やはり楽しい」

「風呂上がりのフルーツ牛乳は美味である」

第六報告書～ホテルマン編～

全く、どうしてこの世界の人間は土偶以外の遺物に興味を持つのだろうか。

ジョーンズはお客に頭を下げつつ、そう思っていた。

地球から再びミッドチルダへと帰ってきた彼は、今回はホテル・アグスタという高級ホテルの従業員を調査しているのだ。

それにしても、どの世界でも金持ちは身なりを綺麗にし、高級品を身に着けるのは変わらないらしい。

ジョーンズは目の前の夫人の指輪を視界に入れつつ、そう思った。

ただ、その夫人の外見は豚であるが。

今日はロストロギアと言う、ふざけたガラクタのオークションがあるようで、こういったセレブ気取りの馬鹿共が集まっているのだ。

さて、その金持ち共の中に見慣れぬ制服を着た女性がチラホラいた。

確か、管理局地上本部の制服だ。

……と、その顔を見た瞬間にジョーンズは珍しく驚く。

以前、銭湯で卓球をしたシグナムと言った美女だ。

しくじった！

ジョーンズは内心焦る。

地球人だからと思い、記憶も消さなかったのだが、どうやらミッドチルダからの出張任務か何かだったのだろう。

ジョーンズは顔を合わせぬよう、地下駐車場へと向かった。

確かそこの見回りの仕事を同僚が嫌がっていたので、交代すると言えば、喜んで代わってくれるだろう。

何という巡り合わせだろうか、ジョーンズはそう呟きつつ黒いスーツを正し、地下へと向かう。

さて、地下駐車場の所に来たのだが、何も仕事が無い。

強いて言うならば、このガラクタを満載したトラックの警護くらいだろう。

ホテル側、オークション主催者側でガードを固めているので、ジョーンズの他にもう一人ガードマンがいるが、互いに任務に徹しているからか、会話は無かった。

「全く、何の因果でこんなトラックを守らにゃならんのやら」
無音に耐えきれなくなったのか、男の方から話し掛けてくる。
身長は二メートル少々、スキンヘッドの白人男性だ。
彼は呆れた顔をしつつ、後ろのトラックを指差した。
「金持ち共の玩具のガードなんて、何か嫌な感じだと思わねぇか？おっちゃん」
ジョーンズはニヤッと笑う事で、返事をする。
男も笑い返した。
と、ジョーンズはトラックを離れ、急に地下駐車場全体を見回す。
男性は困惑した表情を浮かべるが、ジョーンズの目にはこちらに来る影が見えていた。
光学迷彩のような物を使っているようだが、彼の目にはその姿がくっきりと映る。
「……クル」
ジョーンズは呟くとコンクリートの地面を蹴り、対象に拳を打ち込んだ。
迫る影は思い掛けない事だったからか、対応しきれずに壁に叩きつけられる。

そこでガードマンの男性も気付いたらしく、ジョーンズの側に駆け寄った。

ひび割れた壁の前に土煙が立ち込めるが、その影の形に煙が避けている。

「……ダレダ」

その問いの返事は、漆黒の爪だった。

ジョーンズは軽く避けるが、男性は驚きで体が硬直し、避けずに当たってしまう。

男性は吹き飛び、目の前の柱で強打した為にそのまま気絶した。

ジョーンズは現れた敵を視界に入れ、目を細める。

体格は二足歩行の人間だが、昆虫を思わせる黒い甲殻と複数の目。

爬虫類の様な尻尾を持ち、首からは赤いマフラーがなびいていた。

そんな姿をした相手は手の甲から出た爪を構え、ジョーンズを油断無く睨んでいる。

ジョーンズはネクタイを軽く緩め、スタスタと昆虫人間へと向かっていった。

これで何度目だろうか。

ジョーンズの拳が甲殻を砕き、昆虫人間をコンクリートの地面に叩きつけるのは。

この生命体は、トラックに積んであるロストロギアを狙っているようだが、一体このガラクタの何がよいのだろうか。

ジョーンズはそう思いつつ、フラフラと立ち上がる昆虫人間を見つめた。

調査期間中に戦闘を行うなど、初めてではないだろうか。

と、再び昆虫人間を殴り飛ばそうと思った時、頭の中に幼い少女の声が響いた。

確か、“念話”というやつだ。

『ガリュー。
もういい、帰って来て』

その少女の声に従うかの様に、ガリューと呼ばれた昆虫人間は床に

黒い光の球を打ち込み、土煙を巻き上げて消える。

ジョーンズはネクタイを締め直し、敵が消失した事を確認すると、気絶した男性ガードマンの介抱へと向かった。

やれやれ、何か良くない事が起きそうだ。

今回は特に調査が出来ず、少し残念そうにしていたジョーンズである。

第六報告書～ホテルマン編～（後書き）

・調査員ジョーンズから本星へ要請。

今回ミッドチルダに於いて、ホテルマンの任務中に未確認の敵に遭遇。
今後も襲撃の恐れがあるので、念の為に武装の用意を要請する。
武装は私の宇宙船へ送っておいて頂きたい。

・本星より、調査員ジョーンズへ。

要請を承認する。
各種武器を君の船に送っておいたので、目録と共に確認するように。

・人対艦レーザーキャノン
・レーザーサーベル
・ハンドグレネード
・レーザーライフル
・レーザーガン
・人用バリア発生装置
・ロケットランチャー
・治療キット
・自動運転バイク

以上、調査を続行せよ。

アナザーサイド～謎の男の影～

ホテル・アグスタでの任務後、機動六課の前線メンバーは隊長も含め、全員が会議室へと集められる。

「みんな、これを見てくれるか？」

機動六課部隊長の八神はやての合図で、会議室のモニターに幾つかの画像が現れた。

画質は悪いが、そこには白人の中年男性が映っており、地下駐車場にて未確認の敵と戦闘を行っている場面である。

「……すごい、この人魔導師なの？」

高速で動き回る敵を捉え、堅牢そうな甲殻を一撃で破っていた。

それを見た高町なのはは、感嘆する。

だが、はやては首を横に振った。

「いや、彼自身は魔力を持っとるみたいなんやけど、戦闘では一切使っとらんで」

それにざわめく会議室。

そして、画像処理でより鮮明になった男性の顔を見て、何人かの隊員が声を出した。

「なっ、彼はジョーンズ殿！何故ミッドに！？」
「ティア！あの人！」
「……うん、アイスクリーム屋さんの人だよね」
シグナム、スバル、ティアナがそれぞれ画面に食いつく。
「シグナム、このおじさんを知ってるの？」
金髪美女のフェイトが尋ねると、彼女は頷いた。
「ああ、地球へ出張した時に、銭湯の温泉卓球で試合をした方だ」
「スバル達も知ってるの？」
なのはが問いかけると、二人は目を見開いて答える。
「はい、訓練生時代によく行ったアイスクリーム屋さんの店員さんなんですけど……」
「しばらく行ってない内に、仕事を辞めちゃったみたいで……それっきりです」
会議室に沈黙のカーテンが降りた。
「ホテル側は、こんな男を雇った記憶も記録も無いって言っとる。この画像も、消されたデータを何とかサルベージして組み上げたモンやからなぁ」

はやてはそう言うと、軽く頭を叩く。

「あたしも、どっかで会った気がするんやけどな……この人に」

すると、なのはとフェイトも言った。

「あっ、私もなの」

「二人も？実は、私もどこかで見たような気がして」

「ホンマか！？」

だが、それ以上は思い出せない。

取り敢えず、この謎の男性の事は注意するとして、議題は次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティへと移った。

その頃、スカリエッティのアジトでは、主であるスカリエッティが画面いっぱいな映るジョーンズを眺めていた。

その後ろでは秘書をしている女性、ウーノがディスプレイを操作している。

「あのガリューを撃退した男……一体、何者なんだろうねェ？」

ウーノが顔を上げ、言った。

「ミッドチルダや各次元世界のデータを洗い出しましたが、彼の存在はどこにもありませんでした」

それを聞いたスカリエッティは、映像解析ソフトを使って、ジョーンズの体を調べる。

だが、人間と何も変わりは無かった。

現物を精密検査すれば分かるかもしれないが、映像だけでは限度もある。

「……一体、どこの誰なんだろうか。

そそる、そそるねェ……」

スカリエッティは検査結果に薄く笑い、画面に映るジョーンズを見つめた。

「ヘクチッ！！」

その頃ジョーンズは、都市部で就職活動に精を出していたそうだ。

くしゃみで出た鼻水を拭い、ペラペラと求人案内を読みふけっていた。

アナザーサイド～謎の男の影～（後書き）

・今回の調査報告

「不況の波は辛い」

第七報告書～水道局員編～

この世界の人間も、生産過程や消費によって汚物を出さずにはおれぬらしい。

ジョーンズは今回、水道局員となって下水道の調査をしていた。

ミッドチルダには廃棄都市区画という場所があり、誰も住んでいないのに一応下水道は通っているのだ。

今回の検査は、そこに異常が無いかを見るものである。

それにしても、どうしてこうも廃棄都市というのがあるのだろうか。

あった所で、ジョーンズから見れば邪魔くさいだけだった。

とは言ったものの、調査として下水道内を歩き回るジョーンズ。

すると、奥の通路から何かを引き摺る音と、ペタペタと歩く音が下水道管内に響いた。

ジョーンズは本星から送ってもらったレーザー・ガンを意識しつつ、音に近寄る。

「……はぁ、はぁ」

姿を現したのは、大体四か五歳程の女の子だった。

粗末な服を纏い、足には鎖と共に二つのケースが括り付けられている。

通路の壁を支えにして歩いてきたらしく、少女はヘトヘトになっており、ジョーンズを左右違う色の瞳で見つめた瞬間、そのまま気を失った。

ジョーンズは足早に少女に近づき、鎖とケースを足から外した後、楽な姿勢で横にする。

更にポケットから小型の診断装置を取り出し、少女の体を調べた。

……ふむ、どうやら疲労や空腹で倒れたらしい。

が、それよりも気になる事があった。

“遺伝子情報に異常、クローン人間の可能性大”

異常と言っても、別に病気や何だと言うわけでなく、何か特別な事のために遺伝子を改良されたらしいと機械に表示される。

困ったものだ。

放っておいたら、間違いなく餓死するだろう。

この辺りは廃棄都市だし、人の住む都市区画まではまだ少しあった。

……ちょうど良い、ミッドチルダの人間の成長の観察対象にしよう。

そう考えたジョーンズは無言のまま彼女を抱き上げると、持っていたケースごと自分の宇宙船へと送る。

転送システムを使い、一瞬で少女を船の医務室へと搬送した。

……さて、仕事の続きをしよう。

ジョーンズは機械を変え、下水道の調査用の機械を持ち、再び下水道をウロウロ徘徊し始める。

その後、レリックの反応を辿ってきた機動六課とスカリエッティ一味は、結局は互いに鉢合わせになって、レリックを得ずに戦闘だけで終わるという空振りに終わるのであった。

その頃、仕事を終えたジョーンズはあの少女が何を食べるのかと思案しながら、ネコ缶を見つめているのであった。

第七報告書～水道局員編～（後書き）

・今日の調査報告

「ミッドチルダの廃棄都市部は、基地設置には丁度良い場所だ」

・調査員ジョーンズより本星へ。

今回の調査で、生態観察用の子供を確保したので、子育て本を送っていただきたい。

・本星より調査員ジョーンズへ。

でかした、その観察により、ミッドチルダの人間の生態系がより解明するだろう。
それが終われば、お前のミッドチルダ調査も終わりが見えてきたな。
頼み物の件なら、任せておきたまえ。
また宇宙船に送っておこう。
以上、君の頑張りを期待する。

第八報告書～個体名ヴィヴィオ、生態調査編～

ミッドチルダの惑星から離れ、その衛星軌道上を回る月の裏側に、ジョーンズの宇宙船はあった。

いかにもと言った感じの円盤だが、その中にはミッドチルダを遙かに上回る科学力が詰まっているのである。

その中で、ジョーンズは前回保護した少女の調査を始めていた。

自動の記録映像撮影装置を使い、ベッドで眠る少女を撮影する。

この船のメディカルシステムによれば、そろそろ目覚めるはずなのだが……。

と、少女はパチリと目覚めた。

おぉ！と、ジョーンズは何となく感動する。

一方、少女は起きた瞬間に変なオッサンが目の前にいたため、その可愛らしい瞳に涙を浮かべた。

「ふぇえッ……」

ビクビクしながらジョーンズを見つめる少女だが、彼は至って無反応。

少女の反応を見るのに夢中で、怖がられているのはそっちのけである。

「……おじさん、だあれ？」

「ジョーンズ、デス」

最初のコミュニケーション、バッチリ自動カメラは捉えた。

「じょーんず？」

ジョーンズは頷く。

「何してるの？」

「キミヲ、チョウサシテル」

「ちょーさ？」

ジョーンズは頷く。

などのやりとりが三時間程続き、ジョーンズは無害だと判断したのか、少し警戒心を薄くする少女。

「キミノ、ナマエハ？」

ジョーンズが尋ねると、少女は若干迷いつつ、答えた。

「……ヴィヴィオ」

こうして、観察一日目は終わる。

二日目。

「ジョーンズ、お腹すいた」

テコテコとヴィヴィオが現れ、食料を要求した。

ジョーンズはネコ缶を放り投げる。

床に転がった缶詰めを見つめ、ヴィヴィオは頬を膨らませて地団駄を踏んだ。

「む〜！！きのうも言ったよ！ヴィヴィオ、こんなの食べれない！」

そう文句を言ったので、仕方無しにオムライスと呼ばれる料理を作る。

ホイ、と彼女用の小さな机に皿を置き、ヴィヴィオはスプーンを持ってオムライスにがっついた。

「ギョウギ、ヨクシナサイ」

やれやれ、これだから野蛮な生物は。

ジョーンズは注意したが、止める気配が無い。

「コラァァア！！」

ジョーンズは目を見開き、顔を真っ赤にして怒鳴った。

ヴィヴィオはそれを見た瞬間にスプーンを落とし、目をまん丸に見開いている。

「……ごめんなさい」

素直に謝るヴィヴィオの頭を撫で、今度は食器の使い方をしっかりと教えた。

そして、しばらく経ったある日。

「ねぇ、ジョーンズって何なの？」

ヴィヴィオが宇宙船の事や、ジョーンズの事を尋ねる。

ジョーンズは少し悩み、調査員である事や宇宙人である事などを話した。

「うちゅーじん？」

ヴィヴィオは首を可愛らしく傾げる。

よく分からないらしい。

取り敢えず、ミッドチルダという惑星を調査し、色々と秘密裏に調べる事を話した。

「へぇ～、たいへんなお仕事だ～。
えらい、えらい」
彼女が理解したのかは知らないが、何故か誉められるジョーンズ。

とある日。
ヴィヴィオがジョーンズの買ってきたぬいぐるみの山で遊んでいると、ぬいぐるみの雪崩が発生し、ヴィヴィオはクマとウサギのぬいぐるみの間から足だけを出し、埋まってしまった。
ジョーンズは、それを眺めているだけである。
「む～！たすけてよ！」
バタバタと足が動いたので、ジョーンズは念力でヴィヴィオを浮かせた。
一方ヴィヴィオは浮いた事に喜び、キャッキャと騒ぐ。

等々の記録映像を見返すジョーンズだが、全く生態が分からない。
単に無邪気なだけの弱々しい生き物、最近は自分を頼ってきているようなので、本能的に頼れる者を見つける事は出来るらしい。

ベッドで眠るヴィヴィオを見ながら、ジョーンズは不思議な感覚に陥っていた。

……子供に頼られるのも、悪くはないな。

そう言えば、地球で子供の親になった時も、なかなか楽しかった記憶がある。

そうだ。

ジョーンズは思った。

外に……ミッドチルダに連れて行ったら、また新たな発見があるかもしれない。

そう考えたジョーンズは、翌日の予定を考えた。

そして翌日。

ジョーンズとヴィヴィオは、転送装置で人目の無い所に現れる。

ヴィヴィオは、外の世界を生まれた所から下水管までしか知らないらしく、青空を眩しそうに見上げた。

こうして、ジョーンズの野外観察が始まる。

念の為、ヴィヴィオには自分がサングラスをかけたら、真似てかけるようには指示してある。

トコトコとヴィヴィオは街を歩き出し、ジョーンズは後ろに付いて回った。

その後ろには光学迷彩で不可視にしたカメラが浮遊し、撮影を続ける。

「ジョーンズ、あれなあに？」

管理局地上本部ビルだ。

「あれは？」

犬。

すると、その犬の飼い主の女性に話し掛けられた。

「お孫さんですか？」

「エェ……」

ジョーンズが答えると、飼い主はヴィヴィオの頭に触れる。

「優しそうなおじいちゃんを持って、良かったね～」

そして飼い主は犬と共に去り、二人は再び歩き始めた。

ヴィヴィオは、真っ直ぐにジョーンズを見上げる。

「ジョーンズ、ヴィヴィオのおじいちゃん？」

今まで考えていなかったが、もし調査を終えて帰還することになれば、この子はどうなるのだろうか？

そう思ってしまったジョーンズは、ついつい頷いてしまった。

それを見たヴィヴィオは顔を輝かせ、ジョーンズの手を握る。

「ジョーンズ、ヴィヴィオのおじいちゃ～ん♪」

そのまま腕に掴まり、ブラブラとぶら下がった。

ジョーンズは無表情の中に薄く苦笑を混ぜ合わせたのだが、悪い気持ちはせず、そのままの状態で宇宙船まで帰還する。

もしジョーンズがいつもの状態なら気付いただろうが、彼らは気付かなかった。

ジョーンズの後ろをピッタリと付いてくる、地面から指の形に突き出たカメラがあることに。

第八報告書～個体名ヴィヴィオ、生態調査編～（後書き）

・今回の報告書

「子供に頼られるのは、悪くない」

「どの世界も、子供は無邪気だ」

第九報告書～緊急事態、ヴィヴィオ誘拐～

ジョーンズは宇宙船を操縦し、ミッドチルダの惑星へと猛スピードで向かった。

……つい三日前だ。

いつも通りにヴィヴィオと街を散歩をしていると、急に地面から水色の短い髪をした少女が現れ、ヴィヴィオを攫った事。

そして、ヴィヴィオを発動の鍵として“聖王のゆりかご”という戦艦を起動した事。

……許さない。

ジョーンズは唇を噛み、緑の血を流した。

よくも、うちの孫む……。

ジョーンズは首を振り、今し方考えた事を頭から振り落とす。

いや、違う……彼女は大切な研究対象だった。

だから、取り戻すだけである。

宇宙船はミッドチルダ上空に辿り着き、その“ゆりかご”とやらをレーザーキャノンの射程に入れた。

“ゆりかご”の周りには、ガジェットとかいうガラクタが飛び回り、魔導師も空を舞う。

ジョーンズは宇宙船の外に出て、船体に立った。

体にライフルや銃を所持し、グレネードをベルト括り付け、背中にはロケットランチャーを背負っている。

腰には、レーザーサーベルを差していた。

そして、更に対艦レーザーキャノンを持つ。

フル武装だ。

これだけの装備で、我が軍の軍艦一隻は楽に沈めれるだろう。

ジョーンズはスコープを起動させ、狙いを“ゆりかご”に定めた。

スコープは自動的に、敵艦のエネルギー炉に照準を合わせる。

「ヴィヴィオ、イマイク」

ジョーンズはそう呟き、引き金を引いた。

空にて、対“ゆりかご”のための戦闘指揮を任されていた八神はやては、管制官から未確認の高エネルギーを感知したとの報告があり、その座標方向を振り向いた瞬間、そこから巨大な光の束が発射され、強固な“ゆりかご”の装甲を、まるで紙切れの如く撃ち抜くのを目撃する。

すると、艦中に突入して動力炉に向かっていたヴィータから通信が入った。

『はやて！何だ、さっきの光は！？
動力炉が一瞬でぶっ壊れたぞ！！』

「あの砲撃は、動力炉を狙っとったんか……」

“ゆりかご”には、更に何発かの砲撃が撃ち込まれ、浮力を保つことが出来なくなったのだろうか、その頭を真下に広がる海上へと向け始める。

それにしてもあれだけの砲撃で、こちら側には一切の怪我人が出ていない、それはまるで、人間のいる所は狙っていないようだった。

そして、はやては堕ちる“ゆりかご”に近づく、銀色の影を見つける。

それは、いかにもといった感じの円盤……それが“ゆりかご”のどてっ腹にブチ開けた穴に向かい、何かをその穴に放り込んで、空へと消えた。

「……何なんや、一体」

堕ち行く“ゆりかご”を眺め、局員達はそんな言葉しか、口に出来ないのである。

第九報告書～緊急事態、ヴィヴィオ誘拐～（後書き）

・今回の報告書

「あの子は、必ず取り戻す」

第十報告書～突入、戦闘編～

“ゆりかご”に空けた穴から、ジョーンズはバイクで艦内部へ飛び乗る。

宇宙船は一旦退避させ、ジョーンズは猛スピードでヴィヴィオの反応のある部屋まで、バイクを走らせた。

途中、ガジェットとやらが多数現れ、ジョーンズの行く手を遮る。

そんな輩には、ジョーンズは情け無用にランチャー砲を構え、高性能爆薬を搭載した弾頭を撃ち込んでやった。

爆風と共に、スクラップとなったガジェットを越え、更に突き進む。

後ろから追従してくるガジェットには、ハンドグレネードをプレゼントした。

再び爆風が起き、ジョーンズの後ろには誰もいなくなる。

「フン」

ジョーンズは、バレていないと思っているのだろうか……真横に、光学迷彩付きの四脚歩行機械兵器がバイクと併走しているのに気づき、片手で構えたレーザーガンで蜂の巣にした。

途中、光の輪で縛られた女性が床に転がっているのを見つけ出した

が、そのままスルーする。

「……何、あれ？」

そんな呟きが聞こえたが、無視した。

そして、ヴィヴィオのいる部屋の扉が、目の前に見える。

ジョーンズは再びランチャー砲を取り出し、砲撃で壁に大穴を空けて、中へと突入した。

バイクを止め、部屋の中心で、驚いたようにこちらを見つめる二人の女性を見つける。

ジョーンズはバイクから降り、言い放った。

「ヴィヴィオ、ムカエニキタ！！」

「あ、あなたは一体何者ですか！？
どうやって、こんな所まで……」

白いバリアジャケットを装備し、赤い宝玉の付いた杖を持った美少女が、ジョーンズに振り向く。

「ヴィヴィオのおじいちゃんを……返せェ――！！」

そう叫んだオッドアイの美少女……大体、白いバリアジャケットの少女と同年代だろう……に、ジョーンズの目はすぐさまサーチを開始した。

……骨格、虹彩異常、髪の色、全てを取ってヴィヴィオだと断定する。

恐らく、身体を強化する魔法か何かで、成長した身体となったのだろう。

ジョーンズはレーザーガンを構え、相手を気絶させるだけのスタン・モードに変えた後、ヴィヴィオへと撃った。

だが、虹色の高エネルギーにより、レーザーが相殺される。

それだけでなく、ヴィヴィオを取り巻くエネルギーが衝撃波となり、ジョーンズに襲いかかった。

「……グッ！！」

壁に叩き付けられ、口から血を吐く。

緑色の血液を見た白いバリアジャケットの少女は目を見開いたが、すぐにジョーンズを守るように前に立った。

「あなた、あの子との関係は！？」

バリアでヴィヴィオの攻撃を逸らしつつ、少女が尋ねる。

ジョーンズは口元の血を拭い、答えた。

「ソフとマゴだ」

そう言うと、ジョーンズはどこからともなく変わったデザインのサングラスを取り出し、かける。

「マジカル戦闘モード、リリカル・ジョーンズ！！」

説明しよう！

ジョーンズは戦闘用のサングラスをかけるとモード変換し、調査員から強力な戦闘能力を持った宇宙戦士リリカル・ジョーンズへと変身できるのだ！！

「うわァァア！！！」

白い少女を跳ね飛ばし、ジョーンズに向かってくるヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ、イマ、メザメサセテヤル。
ワタシガ、オマエノ、カゾクダカラ」

ジョーンズの右手に、強大なエネルギーが収束していく。

狙うは、ヴィヴィオの体内にある謎の物体！

『無駄ですわ！
どこのどいつか知りませんけど、聖王となったこの子には勝てませんわよ！！』

ホログラムだろう、マントを羽織った女性が何か喚いているが、知った事ではない。

「王ナド、イラン！

オノレハタダ、オノレニ、ツカエルノミ！！」
ヴィヴィオの拳を避け、ジョーンズは己の鉄拳を繰り出した。
「ギャラクティカ・ジョーンズ！！」
超エネルギーを纏った拳は、ヴィヴィオを守る虹色の衣を少しずつ削っていく。
その衝撃で、周りの床が粉砕していった。
「アァァア！！」
「グ、ギギギ！！」
だが流石のジョーンズも、中々狙いに拳が届かない。
と、白い影がジョーンの隣に並んだ。
「何だか分からないですけど、私も手伝います！」
手を突き出し、先端にピンクの光を集め出す。
「スバルのパクリになっちゃうけど、行くよ！！」
その桃色に輝く拳を、ジョーンズと同じく虹色の衣に叩き付けた。
「はぁあ……！！ディバイン・バスター・ナックル！！」
ピンクの閃光が溢れ、ジョーンズの“ギャラクティカ・ジョーンズ

”と混ざり合う。

「「これでェ、どうだァ――――！！！」」

二人の拳は虹色の鎧を打ち砕き、真っ直ぐヴィヴィオの胸部へと吸い込まれた。

そして、更にその奥にある謎の物体……赤い水晶体まで衝撃は及び、その水晶体は一瞬で消滅する。

「「ヒートォ、エンドッ！！」」

「ガアァアアッ！！」

ヴィヴィオの身体は叫び声と共に光に包まれ、段々と元の幼女へと戻っていった。

ドサッと床に倒れ伏したヴィヴィオ。

ジョーンズがゆっくりと近寄り、抱き起こそうとするが、ヴィヴィオはブルブル震える足で、自分の力で立ち上がる。

「大丈夫、ヴィヴィオ、もうジョーンズおじいちゃんに迷惑かけないよ。
だから、一人で立つの」

「……ヴィヴィオ」

ジョーンズは何万年ぶりに、涙を流した。

そして、ヴィヴィオは覚束ない足取りだが、しっかりとジョーンズの脚に抱きつく。

「ガンバッタ、ホントウニガンバッタ」

「えへへ」

と、そんな中に無粋な声が入った。

『キィィィッ！

“ゆりかご”は大破、聖王もやられるなんてェ！！』

先程のホログラムの女だ。

だが、彼女は知らないらしい。

この世に、悪の栄えた例なぞ無い事を。

ジョーンズは後ろにいた白い少女に目配せをした。

その視線に、少女はチロッと舌を出す。

「あ、バレてました？」

そう、あの眼鏡の女性は知らない。

その後ろに、探索用のピンクの球体が迫っている事に。

「それじゃあ、最後の仕上げといきますか、ジョーンズさん！」

「アア、タカマチ・ナノハ」

二人は互いにの名前を呼ぶと、その得物を床に向けた。

少女は赤い宝玉の杖、ジョーンズは対艦用のレーザーキャノンをスタン・モードで。

「「お返し、たっぷり受け取れェ！！」」

巨大な光の柱が床を貫き、女性のいる所まで突き進んだ。

お返しの光の束を受けた女性は、一瞬で意識を刈り取られた。

それと共に“ゆりかご”の崩壊は始まり、古代の戦船は海洋へと崩れ去ってゆく。

第十報告書～突入、戦闘編～（後書き）

・今回の報告

「違う惑星、違う世界の人だろうとも、目的を同じくすれば結束し、打ち勝つことが出来るらしい」

最終報告書〜ヴィヴィオの祖父編〜

ミッドチルダ湾岸地区、その海に突き出た半島部分に、“次元の女神”と呼ばれる百数十メートルの巨大な像がそびえ立っていた。

片手には杖を掲げ、もう片手には本を携えた女神を見上げつつ、ジョーンズとヴィヴィオは沖合で沈みつつある“ゆりかご”の残骸に視線を移す。

「ジョーンズ、宇宙人だってバレちゃったね」

ヴィヴィオがポツリと呟いた。

“ゆりかご”の最後の残骸が、気泡と共に沈んだ時だった。

「ヴィヴィオ、もうジョーンズと一緒にいれないのかな」

涙を零し、ヴィヴィオはジョーンズの脚に寄りかかる。

ジョーンズは、その小さな肩に手を置いた。

別に宇宙人と分かったわけではないが、事情聴取や精密検査をされたらバレる事だ。

その二人の周りに、何人か局員が現れる。

「ジョーンズさん、ですね。
ちょっとお話、よろしいやろか」

茶髪をボブカットにした少女が、一歩歩み出た。

するとジョーンズは懐からサングラスを二本取り出し、一本をヴィヴィオに渡した後、自分にかける。

ヴィヴィオも、ワタワタと手渡されたサングラスをかけた。

何をするんや、茶髪の少女や周りの局員が行動を起こすよりも、ジョーンズの指がその手の中にあるスイッチを押す方が速い。

スイッチが押された瞬間、“次元の女神”の持つ杖の先端が発光し、ミッドチルダ中を包み込んだ。

動かなくなった局員達の合間をぬって、ジョーンズは歩き出した。

「すっごい、ジョーンズ！
いつか、ヴィヴィオにも使わせて～！」

その後ろを、ヴィヴィオはパタパタと追いかける。

彼女は追いつくと、ジョーンズの腕にしがみついた。

ジョーンズはそれを振り解く事無く、そのまま歩いていく。

それから数日後、あの事件はＪＳ事件と命名され、機動六課が解決したという内容で、全て終わったのだった。

平和となった街中にて、人々は何も無かったかのように、日々の生活を送っている。

そんな街の、とある喫茶店。

午後の一時を楽しむ少女達の、愉快な会話が響いていた。

「宇宙人、宇宙人やで～、フェイトちゃん」

「もう、はやてったら……」

その後ろの席にて、珈琲とジュースと軽食の値段の書かれた伝票を取り、オッドアイの幼女を連れた白人の中年男性が会計を済まして店を出たそうだが、それを気にする者は誰もいなかったそうだ。

ちなみにＪＳ事件の後、ＵＦＯの目撃が多発しているそうだが、これは一体何であろうか。

噂では、ミッドチルダを調査していた宇宙人の報告により、様々な星から調査員がやってきているらしいのだが……それは事実だろう

か。

ただ言えるのは、可愛らしい幼女を連れた謎の調査員が、まだミッドチルダにいることは、確かであるという事だけだった。

最終報告書～ヴィヴィオの祖父編～（後書き）

・今回の報告

「まだまだ、調査は続けれそうだ。
ミッドチルダを拠点とし、様々な世界を調査することにした。
この子と一緒に……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7330p/

宇宙人ジョーンズ：ミッドチルダ調査報告

2011年1月3日16時16分発行